

ピエール＝フランソワ・モロー講演会

(科研「二つのスピノザ・ルネッサンスの狭間——十九世紀フランス哲学におけるスピノザの影」とスピノザ協会の共催)

10月13日(土)

15:00-17:00

学習院大学 北二号館(文学部棟) 10階 第一会議室にて

-

- 講演者：ピエール＝フランソワ・モロー(リヨン高等師範学校教授)

講演題目：「19世紀フランスにおけるスピノザ主義と汎神論」

講演趣旨：スピノザはその著作が現れるやフランス語圏ではずっと読まれてきた。17世紀の議論はとりわけ聖書解釈、無神論告発、善悪の相対性といった問題に関わるものであった。18世紀においてスピノザの影響は生の哲学に関する論争にまで及んだ。スピノザ主義はデイドロをはじめその他の人々においてある種の生物学的唯物論の基礎づけに役立ったのである。19世紀になると知的世界の新たな局面に人は直面することになる。フランス革命と帝政のあと、フランスの大学制度は公認の哲学というものをもはや持っていなかった。(他方国境の向こう側ではドイツがカント・フィヒテ・シェリング・ヘーゲルといった輝かしい系譜を発展させていたにもかかわらず。)カトリック教会は大学をコントロールしようとし、そうした教会を感覚主義者、唯物論者、あるいは社会主義者たちが批判する。そうしたなか、ヴィクトル・クザンは新たな哲学の基礎づけを試みる。彼はまずヘーゲルに依拠しようとするが、これは彼を「汎神論」とみなす激しい攻撃を引き起こす。そこでクザンは次にデカルト主義を標榜することを選ぶ。「スピノザ」はただちにこうした論争に結び付けられるようになる。まず最初は「汎神論」の代表として。論争は次には汎神論をデカルトとの関係において位置づけなくてはならなくなる(デカルトを危うくしないでどうやって汎神論を批判するか)。そしてクザンは、最後はデカルトを無罪放免するために「汎神論」をユダヤ的伝統に帰することまで考えるようになる。こうしたクザンに対抗して、他の思想家たちは反対にスピノザをよりどころとするようになるであろう。テーヌはまさにそうしたケースとなるであろう。

(当日の講演はフランス語でおこなわれます。講演会終了後、懇親会を兼ねたレセプションを予定しています。)